霜やけし樅の苗木の下枝は山の一とたひらにすがれたり見ゆ

一谷の紅檜が枝の猿をがせ夕山颪にしらじらとゆらぐ

日本の最高鐵道地點といふ塔山驛を往き還りしことを憶はむ

阿里山中に部落をなして千人のひと棲めりちふぞこれの山ふかく

一山に燒けて立枯るる檜木の奥新阿里山庄のいらか涼しき

運河

天長節拜賀式に着なむフロックは見たるばかりに汗湧くらしも

運河の風吹き通す緣に酒飲むをたのしむ一刻に生くるしるしあり

初夏の朝の岸壁に荷揚げせる樽酒匂ふいかにさ
やけき

對岸の林中にうごく將兵の號令ひびく運河の潮
に

隣りびとうとましきかも油斷れし車井のごと啼
く鵞鳥さへ飼ふ

風こもる合歡に鳴出でし初蟬のやはらかき聲は
えこそつづかね

檬果を冷やし食みつつ夜半にしてゆるぶ暑さを
妻とかたらふ

梅雨

偷臺より卵の殼を吹きおとすさやかなる風の中
に朝餐す

强傳染病棟に永く人容らずわが胸丈に徑のなつ
ぐさ

テニスコートの行潦に浴む雀を治療のすきに見つつ樂しよ　娼妓病院

荒降りの雨に摧けてぞ鳳凰木の花も蕾も軟ら葉も散る

舫ひ戎克に鳴らす胡弓はさみだるる岸壁にききしばし和ごまむ

野末なる梅雨雲に見てし夕映をなつかしむときに雷とどろきぬ

晩餐

夕立いま霽れし西日に紅の一むらカンナしたたりて咲く

新高連峯をかくす夕立は忽ちに安平に延びて人を散らしつ　コレラ豫防注射行二首

媽祖廟の塀に盛り上げし白龍を吹降りしまくゆゆしさは見よ

帆まかせの戎克の航行はたぬしけむ月のあかきに歌ごゑきこゆ

養魚池の土手の晩餐に子らよ見よ臺南市のいらか今夕立つを

相對死のむくろゆはへし帶を斷ちま晝日のもとに別れしめつる　檢死

水死人の相次ぐ運河をわが子ろは泳ぎ怖れず今日の夕べに

いこひ

夕餉のあと運河のへりに椅子を据ゑ涼むならひは日の沈むまで

わが叩土に足形をとめし飼犬もやみ死にてより月ぞ經にける

內地の子に龍眼をやるとこのあした箱に挽く鋸の屑にまみるる

暁に暑中稽古にかよふ吾子はお胴きたるまま朝餉にかへる

よべの時化に軒の絲瓜の蔓先や棚をはづれていくつもさがる

見はるかす四方の養魚池の土手に生ふる尾花ぞまがふ天の白雲

秋來

魚釣るや河向う安平海道をいゆきかへらひマラソンつづく

新高のかたに起れるいかづち雲すでに釣垂るる我上におよぶ

落下傘を仰ぐ目先に絲曳きて蟲下り來る鐵刀木より

けふも廟に來て遊ぶ女狂人の自が子いたはるさまあはれなる

病みこやる妹がかたへに呑む酒の酔ひがたくして秋の夜更けぬ

閨の灯にあらはなる壁虎のまぐはひを見つつ寝酒を呑み干さむとす

水牛が溺れ死にしちふ夕刊記事に獨り笑のこみ上げきたる

昭和八年

養魚池

蟷螂(かまきり)が障子つたふ音の耳に冴ゆる夜ごろはろけき妻をしぞ憶ふ　妻内地歸還

おもおもと垂るるバナナの花を見つつ夕暮の窓に心落ちつく

あら草とのみ見すぐしし垣のへの三つ葉を摘みて食ふこともなし

養魚池の夜明風荒れて土手草に跳ねあがる魚を兒らが拾(ひろ)ひ來(く)

戎克(じやんく)の帆を枯原にひろげあかあかと桶の血をぞ塗る豚の生血を

勤もちて通る廓(くるわ)の塀ごしに霧におぼろに猖々(しやうじやう)木の色

簀(す)を建て並め北風に構ふる養魚池の眺はゆゆし曇の下に

竹の朽葉踏めばにほひたつ竹溪寺の徑のおくがに鉦を鳴らせり

關仔嶺溫泉に遊ぶ

關仔嶺溫泉道路は猖々木の並樹の奥の橋にきはまる

龍眼の木原に孤つ咲く梅に天つ日かげのそそぐさみしさ

春淺く山椒の木を植ゑむとする河の邊の土のしめりゆたけし

父兄會より妻のかへりはいと遲し五時にひもじく獨り酒をのむ

臺南市定期種痘場にて

電燈を目玉になせる龍と虎の畫壁のもとに種痘の卓を据う

印度護謨樹の芯は伸びきり樓門の檐の風鐸にいまだとどかぬ

耳朶に手をやれば粗き春埃日もすがら痘を種ゑて疲れし

押並ぶ五人の子らの朝がれひひたぶるにしてあはれなるかな

高等犯人を診る

千人近き囚人をここにとりこめし構内を右し左し行くも

受刑者ら働ける花壇の仙丹花に蝶の閃くに我眼とまりぬ

あからさまに臭ふ厠の前を過ぎ未決囚診療所に鍵鳴らし通る

牢舎ぐちの諸悪莫作衆善奉行のポスターにそこ出で入る人はかかはらず

思想犯人を診察する時に近く響く食器かたづくる音うるさし

此の女囚に妖しき體臭を感ずるは既に午過ぎて饑じき故にやあらむ

あら草の根をこじ挘る受刑者の汗は甃石の面にはふり落つ

小居

山羊が來て嚙みとどくだけはもとあらの扶桑華を籬に繞らして棲む

僞筆山陽を床に掛けはなし臺南の酷しき夏に三度あへらく

養魚池ごしに見ゆる公學校々庭の鯉幟にはずむ運河の風は

厠より芳香油にほひくる部屋に寢覺めてつまれる活計をぞおもふ

小夜中にとらむとしたる溲瓶より逝ぐる守宮に
我が駭きつ

卵生みて啼立つる雞のうるささはかかり來れる
電話口にいふ

運河のへりに月を樂しみ酒のみて下駄を偸れら
ぬ我とわが妻

船舶檢疫

南風吹きて若葉のなびく岬山に安平燈臺ま白に
ぞ立つ　安平港外五浬沖

梅雨空に白浪あぐる沖に向け檢疫汽艇を乘出さ
しむ

貨物汽船に檢疫を了へて稅關びとと接待ウヰス
キーに暫しくつろぐ

天山丸の應接室にておよそたわいなき救國抗日
傳單の幾枚を見き

百五拾萬圓てふ阿片樽の山を見つつ支那海賊剽
掠のことに思ひ及びぬ

長雨

梅雨の合間の安平海道に滿ち行く兵の喇叭すが
しみ立出でて見つ

酒ゆゑの肥大肝臟を手におさへ雨荒き夜半に命
をしめり

酒を飲みほしいままなる生を營みし我に漸くつ
まる命か

大時化の眞闇の庭にひきがへるの間をおきて鳴
く聲のやさしく

長雨にこもる時しも金談に人來りいよよ我をく
さらす

兒らのごむ靴を並べ乾かす生垣の榕樹の芽は雨
に飽きていきほふ

ひと荒れの低氣壓すぎて二番咲きの夾竹桃にぞ
更くる夏光

晝庭

野生松葉牡丹の花原に天づたふ日ざしをよぎる
鳶のかげ疾き

迷ひこみて庭を水牛の歩くにぞ花踏ませじと妻
子らさわぐ

さわがしく晝寢さめたるわが目には庭を塞ぎて
水牛立てる

汗垂りて苦しがりつつ寢入りしが夜半のおほ雨
に忽ちに覺む

鮮人娼妓の治療をしつつ父母といふ言もおぼ
えし

町廻りの女奇術師天華の獅子は臺南本町にして
大きくさめせり

路上

時化に弱り籬のへにとられし大鴫は燒きてや日曜の朝酒汲まむ

鐵刀木の花は黄に敷きしめりたる晨の路に愛しく色立つ

桂竹の一むら透けてすがすがし彼方に白き雞こゑをあぐ　北郊開元寺

たまに來つる郊外道路はあかつきの霧に牛溲馬勃にほへる

たづき

版畫彫ると木屑の中にひたぶるに暑き刻すぎ夕べになれり

養魚池のうろくづをねらふ大千鳥夕日を浴びて空にひらめく

一尋(ひとひろ)の芭蕉の實(み)房(ふさ)土にとどき今すぎし夕立のはねをかぶれり

邪子湧く暑き日こそはかさね行け娼妓治療をたづきにはして

大本(おほもと)支部よりしつこくおくりよこす愛善新聞を我は雪隠のよみ物にせり

日月潭霧社と遊びて月の料(しろ)にいたく食ひ込むに例の禁酒す

昭和九年

湖

廓近き石油倉庫の火事場には群衆に目立ち藝者女郎なまめく

石油流れて波のぎらつく運河にはほのほ遁げむと戎克犇めく

食卓の蘭の葉にゐる一つ蠅電扇の風に怺へて飛ばず

湖より湧きのぼる雲はくろやまの水社大山をおぼろかにせり

石印蕃人の庭の砌にこぼれ咲く烟草の花を妻は知らぬに

蕃人に刳舟こがせ山の上の湖にぞ遊ぶいまのうつつに

霧の立つ夕湖の上をしらとりの鷺の二つら見まぎれず飛ぶ

霧社游草

人止の關の派出所にて鐵條網を宵にゆるされし
より道の險しさ

夜に入りて蟲すら啼かぬ霧社の山に足痛む此妻
をあはれにぞ思ふ

夜の蕃路をたどたどとゆくときに小螢のひかり
かそけく谷かけて消ゆ

曉に人音もせぬ霧社の宿の戸ぼそ搖る風を妻と
さむがる

霧社の山四方をよろへる深谿に曉のくもの湧く
は寂けし

二抱にあまる楓の秀枝には雲霧さやりもみぢた
るかな

兒等をかばひて兒蕃に立對ひ霧社校長は酷き討
死をせり

谷底に滿ちたぎちゆく水のおとの聽えこぬ高き
岨をこそ行け

安平漁家

茅の屋根に冬瓜生らせうす暗き家に平かに人は
棲むべし

鹽氣吹く荒庭に短き枯葦は小笹の如く豚に踏ま
るる

庭すみの高木より鳶がとり落す虱目魚は我の猫
に食はるる

養魚池の小春の空に來し飛行機に飛び立つ白鷺
の群ぞはなやぐ

夜半に覺めてもの書く癖や冷酒を呷るが故の腹
ゆるみつつ

季節風

季節風一夜荒れつつ養魚池の魚を凍えしめ岸に
ふき寄す

欖仁の葉をふるひつくす粗枝に白頭鵠囀れり朝
日に向きて

前山の夜霧を染むるおぼろ灯はつぎつぎに渓の
溫泉に下り來る

臺南市種痘雜詠

こじらせし風邪涕すすり冴返る裏町の廟に一日
種痘す

種痘すみし廟ぬち寒く掃きよせし酒精綿を燃し
てあたりぬ

髯しろき廟守は種痘場の紙屑の文字あるを選り
て惜字塔に焚く

種痘にうちかかづらひはや月半あはれ心に沁み
ることだにも無き

竹と松に君が妹背をたぐへむと孔子廟に朱熹の
拓本をかふ　大村君新婚

夏日

脚を病み苗あつらへし茄子のたのもしくつけし
花すら杖によりて見つ

向う土手を舁れゆく豚の一さわぎ遠ぞきて夏の
日は沈むなる　安平運河

山下の相思樹林をぬきんづる赭き戎克の帆は移
りつつ　安平城趾

雨降りて疊にのぼる蟻多し今着きしアララギの
表紙にも這ふ

梅雨晴るる庭にゆたけき濱木綿の花さへ葉さへ
照りて目に沁む　臺南娼妓病院

颱風

絲瓜（へちま）棚（だな）を採みくづしたる颱風は一夜（ひとよ）をとほし今
朝なほも荒る

運河沿ひをとどと行く朝の銀バスに空にまぢか
に鵜の列みだる

夕霧にあらはれし五位鷺（ごゐ）はちかぢかと我家のう
へを越えざまに啼く

一つ一つの蟹（かに）煮えて赤くなりゆくを珍しみをれ
ば雷とどろきぬ

大蟹の甲羅（かふら）に酒を滿てて呑むわが目の前の扶桑（ふさう）
花（げ）の雨

合歡木

汗と革をにほはせて行く兵の列は蒸暑き夕べの
巷（ちまた）につづく

たちどころに昏れかかる空に合歡（ねむ）の木や木末（こぬれ）な
る葉は閉ぢあへぬまま

叱れども裏の廣場の水牛にまた乗りて遊ぶわれの兒等はや

いらち心おさへ來りて苦力(くりい)らの木の香たてて大(お)鋸(が)をひくさまを見つ

炊(たき)置(おき)の飯(いひ)にたかる蟻をおほよそに除けてぞ食(くら)ふ暑き夕べに

昭和十年

家常

月のもとに低くなづさふうす雲にとどく五位鷺
の聲啼きて過ぐ

鹹水養魚池にかこまるる我園におほよその青菜
花草はそだつことなし

針のめどになづむ古嬬にはがゆがりふみ讀みさ
してとほしやるなり

いくたびか我家を襲ふ小盗人をにくがり夜々に
しばしばも覺む

臺灣冬雜詠

うとうとしく棲める隣人の飼ひそめし七面鳥の
啼くを妻は嫌ふに

朝の部屋に霧吹き入るる風のむた遠き鵞鳥の聲
もこそすれ

リヤカーに豚を啼かしめ運び去る土手のはるかに安平灯る

息もくれず金亀樹に荒るる季節風夜深く風呂に沈みてぞ聞く

やもめ雞伏籠の中にしろじろと卵生みてをり初冬の土に

今朝や過ぎし時雨にぬれて寒々と庭の猩々木はかたまりそよぐ

置き忘れしものの如くに戎克見ゆ陽を呑みてすでに昏む波の上　安平城趾にて

冬　夜

「柿本人麿」を讀む夜の卓に天井の守宮音たてて落つ

冬の夜に大き耳くそをほりいだし掌にころがせば寂しくもあるか

寒き夜にバナナの澁味舌にのこる侘(わび)しさもちて
今は寝なむか

わが作りし公學校々歌はこの頃のあさな朝な養
魚池をこえてきこえ來(く)

友が庭小春日和(こはるびより)に蕃茄(とまと)紅玉(あかだま)のしじに照る見つつ
妻とともしむ

吸飲の代りなるストローを上り下る蟻に目をく
れて熱計りをり

雑歌

秋田生れの新妓(しんこ)といふが検査臺にのぼらぬまへ
に涙しぼれる

藝娼妓検査一首

賀状のあと便りなかりしが忽ちに長崎松島坑視
察の旅に君死す

季節風(きせつかぜ)疊あはひより吹上ぐる野住ひのわぎへに
兒ら二人病む

わがうから病みつぐをり大本の信者來り賴まぬに祈り明日またも來ちふ

土用には儲けなむとぞ冬池に鰻の魚苗放つ翁と語る

季節風に初芽皆折れし欖仁の二度芽ふくよかに庭の上のそら

避病院の塀を拔く木棉の莢はぜて我が緣に疊にうるさくぞ降る

輪血了へし人の頰に生々とのぼる色見きはめしのちに我は酒呑む

チフス患者二人の輪血に疲れきりま夜中にあふる冷酒うまし

去年に植ゑし山椒が皆枯れしことくやしみ言ひて筍食へる

和氣生も五十にとどきつらむ酒はひかへよと姉の便りのちびし筆あはれ

一冬を枯れざまに過ぎし縞蘭の芽立まさやかに
こもる鉢の土

中風を病む

昏睡のさむるに近き幻覚にいたく欲しかりし物
憶ひ出でず

中風の昏睡よりさめゆくまぼろしが怪しくもこ
びりつきけりうづく頭に

右半身不随より氷塊の中に醒めしとき妻に子に
かくる聲の滯りき

雨の日曜の遊びにも倦みし兒らは我の痿えし手
足たたき揉みつつ唄ふ

蚊遣香のけぶりの中に夕暮は足蹇われをさびし
がるなり

かやり香に落つる身まはりの蚊をかぞへ籠るけ
ふの日も梅雨にくれつつ

原の家梅雨のくもりにはつか射す夕茜空(ゆふあかねぞら)をたの
みわたりぬ

梅雨やみて海霽れわたる運河の朝足塞(あしなへ)われのか
く遠く來し

この夕べ籬(かき)に咲かなむ夕顔の莟(つぼみ)たのしめり足塞
われは

養痾漫吟

足塞(あしなへ)の我は生きつつ寂びさびと老びとめきて夕
顔のもと

あつき飯(いひ)にかぼちやねりつけ旨(うま)がれど夕餉の酒
は今も思ほゆ

痺(しび)れたる口をこぼるる飯の粒を膝にまさぐるた
わらはのごと

ビスケットを皿にまさぐり停電の夜の蠟(らふ)の灯(ひ)に
ものを念(おも)へる

生活必需品たりし酒がはぶけてかくばかり氣樂
なる生計(くらし)はかつてせなくに

病閑小吟

五十越えて父は病めるに小學にいま通ふ子らの
ただに勇まし

あはあはと明けくるるものか酒をやめいとせめ
て欲しきもののあらなく

知覺なき腓(こむら)ひたむきに刺す蚊だにあはれがりつ
つ我は見むとす

たづさはり生けりし人ののちしばし嫁ぎゐして
ふ家を見むとす　某日、臺南大正町

幽かなる獨りごころをたもちつつ我は茶をのめ
り月の下びに　病中對明月

子が行方(ゆくへ)幾日知れずつぎて病める我にひやびや
と秋かたまけぬ

偏難(へんなん)にいらつ心があなあはれ妻に怒りてすぐに
悔いけり

月の夜にバスの埃がほのぼのと運河の汐になづ
みゆきつつ

わが蚊帳(かや)に這ひをる守宮(やもり)夜半の灯に腹透きて呑
める蟲つばらなる

獨り身に老ゆる使丁(してい)がこまごまと蘭をいたはり
て心ゆだぬる

昭和十一年

續病閑小吟

養魚池の朝の反射に金龜樹のうれ葉かぎろひて
翡翠(かはせみ)潛む

パパイヤを採らせて知りぬ日頃來てさへづる白(ぺ)
頭鵯(たかう)の啄みけむを

たかだかと今朝秋の潮のぼり來る岸に杖を立つ
歩み止めて

瀉血(しやけつ)あとの現身(うつしみ)の頭(あたま)いと輕き夕べにかをり高き
松茸(まつたけ)をくふ

命の危(あやふ)きに馴れて偏癱(へんたん)の身を忘れふと旅心湧き
くる寂しさ

歴史館より水族館への道入りくみて秋暑き巷(まち)に
牡蠣殼(かきがら)にほふ

鳥影

いとけなき旅のたよりは樂しさのかぎりなきときに友を悼める

足蹇へし今にして思ふ山川に河鹿とらへし淸き遊びは

たうべきれずたけし絲瓜はうつくしきたわしにしたて妻が喜ぶ

樹のはしに影移りつつ聲啼かぬさみしき鳥をしばし見て居り

なめ茸を瓶五十個にやしなひ三十日經つかぎりなく生ひ出でし此嬉しさは

海風

海風のひた吹きあつる臥墓原うすら寒き陽のをりをり射して

中風のあたま亂さじむかひ家に啼き上ぐる鵞鳥だに憎まざるべし

一家五名傳染りし腦炎を守りつつ年暮れ年改ま
れど心ともなし

臺南白金町移居

腦炎を鎮めし我は五とせの職より退かむこころ
決めたり

運河べりの景色よろこび五年經しこの家をたた
み去る町醫とならむ爲め

金龜樹を虐ぐる風に立ちて思ふ此の家に二度病
みて生き延びしかな

蘭を培ふ

劍蘭の太葉の照りのつやつやとみ冬だにともし
獨り灯のもと

酒拭きにせる胡蝶蘭の太厚葉のつやのめぐしき
に花芽さへ立つ

冬の夜のわが蘭の葉にとまりをる一匹の蚊をばはじきとばせり

阿波鑛山を憶ふ

第一坑より第二坑口へ渡る谷の戸に朝霧にこもり啼く時鳥(ほととぎす)

霧こむる谷に入る徑(みち)ほそぼそと行きなづむあかつきに啼(な)く時鳥

坑夫の娘可愛(かな)しと著物呉れ妻に怒られしことも杳(はる)けし

阿波かな山の坑夫の賀狀も六年經て數ぞ減りゆく諸國に散るもありて

鑛山の荒き勤務に四年堪へし昔を戀へど今は足(あし)塞(な)へ

露霜の一日(ひとひ)かわかかぬ溪の常蔭(とかげ)錦木と咲ける龍膽(りんだう)のむれ

怪我人を診ると堅坑の五百尺下りなづむ吾に坑
夫ら笑ふ

老姉來る

獨り肥後より來ましゝを臺南に迎へまつる姉は
六十九になり給ふ尊さ

常若にいませる姉は子をうまさず我の長男を養
ひ給ふ

九年前に阿波鑛山にて逢ひいまは遠く臺南に相
まみゆ老い姉と我と

プロピデンチヤ城が照り返す我が家に朝餉をぞ
いただく姉と向ひて

足痿が自轉車にまたがり臺南市をいゆきめぐる
までに癒えてしものを

一日二日歌なきことを思ひ出づる日の夕ぐれに
寂しくて居り

散歩

つぎつぎに池に轉げ込む石龜(いしがめ)をあるき語りの君が氣付かぬ

赤榕樹(あかう)の大木に住めるをさな猿夜半(よは)の厠にわが行けば鳴く

あひ睦ぶ犬と猿とを侶(とも)としてこころ恍(ほ)けゆく午(ひる)の休に

闇の庭を歩める時にいづこゆか槖吾(つはぶき)の葉むらに淡き灯させる

造り茸(たけ)なめこの胞子がひそかに大瓶の肩にたまる春の夜

枕べのバナナにつく廿日鼠を吾は知りをり春のあけぼの

樟落葉

月かげに涼みかへれば犬臭きわが玄關の俄にあつき

樟(くす)落葉(おちば)匂ふ參道の木の間より虎頭埤の浪の蒼ずみて見ゆ

煙などの動くが如き鴨のむれ沖浪の上にしづもりゆきつ

蔬菜と草花を培ふ

床蒔(とこまき)に自(みづか)らしたる茄子(なす)苗を畑に移し植う曇るあしたに

蕃茄(とまと)の腋芽(わきめ)もぎゆくに匂ひ立つゝあしたすがすがとまと裸我は

ひそまりて瀉血しつゝ思ふ夕べには朝顔十五六鉢の定植(ていしよく)せむか

茗話

たまに來しと思ふ髪結が世さが語りつひには二
拾圓借せと切出しぬ

あざやかに二重たつ虹を夕街のせはしきともが
らは仰ぎ見めやも

月のもとに茗を煮て語らふ人のかたへ白々とし
て茉莉花にほふ

おも寄せて目高みだるる山水を口づけに飲めば
苔にほふなり

薪の灰をなすび畠に蒔くことを一つおぼえて怠
らぬ妻

鬨つくらぬレグホンの牡ばかり十羽飼ひ閑かに
あまた無精卵をうめば足るかな

龍眼の花

龍眼の花が香に立ちむしむしむしと雨もよふ夜半の
闇に眼をあく

魔法瓶の氷を夜半に飲む妻のけはひは動物かなんぞの如し

偏癱側の脚の感じは重苦しくこの夜は犬に咬まれたる夢より醒めぬ

妻に怒り鉢朝顔を砕き來しがけさ暑き巷に脚を引ずる

我娘が繕ひくれし靴下の氣持あしきは言はず穿き行く

わさび茗荷いちご作りし阿波鑛山の生活をなつかしみ阿里山の蕗を煮る

夢

首をもたげ庭の夕顔のそよぐ見れば病める一日ぞ閑かなりける

わが自動車の断崖にさしかかる危ふさは熱にうかされ夢みつづけぬ

わが病める閨(ねや)に撒(ま)かれし香水を夜深く嗅ぎて思(おも)ひむなしも

無造作につけ髷(まげ)を疊に置きしまま嬬(つま)は眠りをり寂しくもあるか

雨降りいで縁に上(のぼ)りし雞(とり)のむれはや銘々に糞をおとせる

ふくれくる蝦蟇(がま)を弄(もてあそ)び慰まず運河の夕浪に我は礫(いし)うつ

旦暮

縁に立ちて膝につきたる猫の毛を夕ぐるる山梔子(くちなし)の花に拂ひぬ

天(あめ)の門(と)を飛び渡り來し隼(はやぶさ)はプロビデンジャ城榕樹(ようじゅ)林(りん)の中に沈みぬ

中風(ちゅうふう)の痺れにも狎(な)れつ今ははた心平かに我はありたし

虎の尾草に蛾がいまだまつはるかはたれに時鳥
あざやかに啼きし思ほゆ　阿波鑛山を憶ふ

殘暑

派出所新築の寄附廻狀をよみさして殘暑の古だ
たみに我はながまる

秋の夜はもののひそけし緣ばなに撫でてやる犬
の寂しくにほふ

心娯しますなげやりにせし蘭のおとろふる頃に
莟もちたる

耗りし髪をひまかけて結ふ妻がへに日曜の外出
を子等が待侘ぶ

阿波鑛山に勤めゐしとき妻に怒り投げつけし此
藥罐に疵ぞ殘れる

日清役の軍夫百人長つづいて藥行商終には鍼醫
となりし叔父みまかりぬ

昭和十二年

朝庭

朝の庭に大蛞蝓のつけしあと露けきコスモスの茂みにぞ入る

ふる里の柿を愛しみて適ひがたき熱帯の堅土に核を埋めおく

うすうすと望月の下を流らふる雲ま近くて椰子にさやらず

後の月一首

うら街の漢薬種商のほしむしろ生薬嗅ぎざまに犬がゆまりす

一と夜いねて別れにとりし此の寫眞を見ても現し世に我ぞ古りける

二十五年前一首

つぎつぎの年刊歌集に小郭家の名を留めむもあと幾度ぞ

病妻

性病患者がいささか歌壇のことなどを聞きかじりゐて話してゆけり

腎孟炎に苦しめる妻の手をもてりこのまま死にもせばと思ふたまゆら

入歯のしろなきをつねにかこつこれの妻彫り深き顔にうまいせるかも

左千夫赤彦の齢超えたる今にして小郭家に翁といふ自覚なし

十一月二十九日秋の感じさへなく單衣はだけて西瓜を食へり　五十一回誕辰一首

おとろへしわが蘭をいふ表具師がリヤカーに載せて預かりゆきぬ

手入よき髭をはねたるかんばせも常のままなる人のなきがら　友の死一首

停立

船とだゆる安平運河の向ひ岸遠くきこゆる山羊
の啼く聲

さむざむと魚の鱗を掻き飛ばす人あらはなり泊
り戎克に

息しろき人が大鋸ひくかたはらに木の香さやけ
み我は佇ちをり

去年に我が治療したりし鮮人の妓が挨拶をせり
暮のちまたに

旅行かむ心ゆらぎは偏癱の脚をさすりて夜半に
鎮めぬ　　臺北歌會

鑛山づとめに見出でし錦木と蜂の巣と老いて折
ふしの目に浮ぶなり　　阿波鑛山回顧三首

蝮蛇らの戀といふにや何匹もがからみあふを見
き坑口の小溝に

まへ溪に洗ひ置く襯衣を鶺鴒がふみて遊びし今
に戀ほしき

時をり

時をりは四十度にくだる臺南の正月にもめげず
朝顔の芽は

凩の土に吹きつくる背戸に出で妻はさらさらと
蜆の殼を捨つ

妻とこの姉とがほむらだつ愛慾の鬩ぎあらはに
て我困るかな

身邊雜事

街頭にさざめき歩む盲生らにかそけき樂しみと
いふもののあらし

さ夜中と天井に騷ぐ鼠らに眞面目に猫をまね母
啼きましき、亡母二十五年忌一首

川岸の霧に歩み來し道下におびただしき家鴨を
挘る女ら

春浅く根分する蘭の鉢底より湧出でし蟻が土間
に散り行く

いく年か手しほにかけし胡蝶蘭をたはやすく貰
はれてのちのくやしさ

ヒマラヤのナンダ・コッタが新高より見ゆてふ
我が嘘を妻疑はず

足冷えて夢はさめたり故郷の町に大橋のうへの
雪をおろすゆめ

行きずりに撫でし我をば見上げつる穉兒の顔が
寝しなに浮ぶ

甘蔗より酒精と糖の採ることわりに酒やめし
我の汁粉のむかな

石を曳きて脚の折れたる馬を繞る人垣の噂には
明日か剖かれむ

十年前鑛山病院に在りし頃を思へば何もかもお
とろへぬ

一事に思ひこだはれや幾度も接ぎそこねつつ蘭のかけ鉢

球根を埋め了へて畝間にいま通す春さむき水が音をたて行く

安平游行吟

燈臺のかげを曳きたる庭の上の砂を動かす風絶えまなし

すでにして海にかたぶく陽となりて反射の中に汽船かかれる

天づたふ日は澄みとほる鹽の山に立つ人のこゑ遙かに聞こゆ

初蟬

初蟬に曉の耳をそばだてて足塞へしのちの命をおもふ

かへりみて夢の歌おほし病脚のゆめにはままになる故にやあらむ

割木積みて匂ふ車のうしろよりあした跟け行く樂しむ如く

漫歩吟二首

朝のもや草に沈みてをちこちに水牛が見ゆ川の中にも

吾子

中學五年のときに家出して三年ぶり運轉手崩れにて吾子還れり

家出もどりの長男が大人くさくなり煙草を喫めり仰に臥たるまま

朝顔に篩ふ堆肥より出できたる甲蟲を捕へ吾子が角力はす

末男一首

我が一生に呑みこみし酒を思ひみつつあした人なきプール見おろす

遠望

煨(おき)に似て赤々と鳳凰木の花遠し朝より峯なす雲
の下びに

久しぶりに出かけしメーンストリートにていか
にも盛んなる葬列に會ふ

我家よりプール越しなる小林(をばやし)にこもる鳥(とり)が音(ね)の
ひもすがらなる

水を惜しむ驅逐艇生活を君說きて洗濯は女より
うましと言へり　　伊藤善吉氏

うつせみは足蹇へてより山行かずあはれ見が欲
しふか谿(だに)青瀞(あをとろ)

阿波鑛山を憶ふ二首

山川の片岸寄りの砂地(すなぢ)には木賊(とくさ)ばかりの繁ほし
一むら

業餘

中風(ちゆうふう)にわがたふれし頃身まかりし人の三年忌に
まゐりあはせし

入院室にて燒けるするめが醫務室に匂ひつつ長
雨のけふも夕ぐれ

新茶(しんちや)のかすを噛みしめつつ逞(たくま)しき空想に暫し樂
しみをりき

夜は九時に治療切上げどこそこの蘭屋めぐりの
のち眠るなり

ままならぬ脚いたはりて人目なき朝の公園をも
とほる我は

穎割葉(かひわりば)に土をつけたる朝顔の芽生え見入りつつ
心ゆらぐに

前住の置きし擬寶珠がはびこりて花咲かぬ庭に
爪紅(つまぐろ)蒔けり

臺南の鮎食ふことが樂しくてアララギ七月號の
表紙よごしぬ

七月七日アララギ着

霖雨雜詠

低く吊りて侘びしき蚊帳に寢覺めをり夢のつづきに降る雨の音

酒をかうむり歌詠みし昔思ふだに老いづく今のかくて清けき

木屑こぼすさみしき蟲が柱に棲みかたち見せぬを今も思へり

七面鳥をはぐくむ雞の騷ぎかな股長に雛の散らばり行くに

肥料とりを業とする人ら朝夙し蘭をいぢりをる我門過ぐる

朝顏の鉢のあひだに瓜を干し日暮れても妻のなほ忘れをり

蕃人に腹割かれし妊婦を生かししが其の胎兒二十五となり現しき吾君　陳超氏一首

銃殺を二度まぬがれし記事に亢奮し蹇(あしな)へし右足を掴みゐき　通州安藤同盟記念

霧剝(は)ぐる夜の明方に金龜樹の池水に靡かふ色は目ざまし　臺南公園

出陣

「忠勇」といふ酒もちこみて出陣の君をぞ祝ふ夜(よる)のくだちに

朝がほの苗換へあひし隣びと待ちまちて今ぞみ軍(いくさ)に立つ

出征兵を驛に二度(にど)おくりあはれあはれ一と日亢奮して感情の統一なし

きびきびと運河架橋の號令が潮にひびきて兵ぞ動ける

臺南市公會堂の警備兵が夕べ夕べ風呂のつもりにてプールに泳ぐ

道曲りて運河見えくる街筋に夕はやき月まともに上る

米利堅粉の荷馬車の馬がたけりたち秋風にこなの飛ぶはめざまし

説教の母に連れられをさな我れ飼牛に生れ變りし人の親のこと信じき

鐵兜の遮蔽網を編むとて女學生の吾子は學校より一夜歸らず

昭和十三年

妻子歸國

早稲田出でて腦をわづらふ吾子の爲にまた還らざらむ妻を臺南驛に送る

幾年ぶり躬みづから靴を磨きつつ古びたるかなやとわが靴を見つ

蚊の螫せる手の甲を髭の剃杙にこすりつけつつ書よむ我は

五十過ぎ今はた偏癱の身が兵籍の未教育在郷兵たりしことも空しき

山の畑に水仙に似たる馬鈴薯の花一めんに咲かせ樂しみたりき

阿波鑛山回顧二首

接木して置きし梅咲かむ實かもなりなむと思ひ出でつも老の寢覺めに

冬夜

うす陽(び)の中(なか)紙屑のたぐひが舞ひ上がる街の季節風に人通り絶ゆ

旗艦○○の主砲のもとにありありと無造作に劍蘭の鉢こそ見ゆれ　映畫一首

七十年後の租税とらるる支那の民を我は思ひみる病の閑(ひま)に

南京(ナンキン)の落ちなむとするラヂオニュースに聽き入りて牛肉を鵜呑みにしつる

友の准尉はつるぎ引きそばめ南京に間に合はぬかなやと發(た)ち際に云ふ　十二月七日一首

敵の影映ることなき銀幕にもの足らぬ我の蜜柑(みかん)吸ひをり

冬の夜半にもの書き耽り腹へりしにふと酒の香を幻覺す

ぼそぼそと獨り飯食(いひは)む我が手より今撫でし犬のにほふさみしさ

日本室素の社長付(つき)といふ娘眞奈のこと思ふなり
父は寢しなに

かさかさと欖仁(らんじん)おち葉の足にさやる公園の夕ま
ぐれ遠き子を思ふ

歳晩雜詠

老いづきて妻子らに別れ年を送るあはれさもた
だにあはあはとして

故國(くに)に往(い)にし吾子が蒔きおける庭隅の愛國莚麻
といふが我の背を越ゆ

庭松の葉刈りのあとに時雨(しぐれ)ふりにほひだつかも
刈りし松葉は

自(し)がうなへる畑を繞りて代々の墓奥山ひとの一(ひと)
生(よ)しぞ思ふ　阿波土佐國境月の原回顧

もやだてる國の境の雪谷に朝日さしきて徹る鵯(ひよ)
が音(ね)

國さかふ土佐北尾根の雪煙目の前にあげて颪すぎにけり

菊の花

啼き過ぐる鵲さみし御葬の終りにちかく明るき夕空　川口少佐以下二首

公園の陸軍臨時馬繋所は皆空きて菊の花咲けるかな

刈芝の浮きたる池に欖仁のもみぢ葉は散る間なく時なく

臺南本町の夜更けさむざむとあめの牛にほひ漂はせ曳かれ過ぎたり

生きながら嚥みこみし九龍蟲が咽元にしばしたゆたひ納まり行きぬ

冬日向いぢけ咲残る爪紅のめぐりにはおびただしく芽生かさなる

枕べのパパヤに穴を穿つ大蛾のふるまひ見をり
夜半の灯かげに

獨居

身獨りは百日だにすら堪へかぬる我に二年强ひ
來ぬクリスチャンの妻は

襯衣のぼたん我がかがりつつこれ以上別居言ひ
こしし妻にくみ居り

臺南衞生課に同僚たりし警察醫二日病みしのみ
の亡骸を拜む

洋服簞笥におよび挾まれ痛むすら老いて生きを
る命をぞおもふ

居庸關に高工卒業の獨子を死なせし君と酒汲み
て泣く

鐵門の中の七面鳥春さむく啼上ぐるそばに扶桑
花は咲く

內地より臺南に屆きし一歲藤（いつさいふぢ）が十日たたぬまに
花芽抽き出づ

庭草

赤瓦の屋根並くもる臺南を見納めて一人別れか
行かむ　臺南小郭家送別會一首

去年（こぞ）いたくきほひ開きしカトレヤがすさむ主人（あるじ）
に今年花細く

妻子住まぬ家のすみずみ草たちて紫蘇（しそ）とトマト
がわきて目に立つ

偏癱（へんなん）の足とぼとぼとま夜中の厠よりかへり目が
冴えてをり　友死す一首

職場より流れ出る黒き水堰（せ）きて五六人騒げり選
鑛婦の子らが　阿波鑛山一首

春埃

いつも來ぬ客がウキスキーなど持ち込みてもちもちと早産術の相談をせり

鳳凰木の花が遠目には熾(おき)と見ゆるプールの杜(もり)に向ひ吾子に戀ひをり

臺灣女の啞が我に狎れ手語(てがた)るは浮(うか)れ女(め)と逭げゆきしその夫(つま)のうへ

若き友のつぎてたはやすく死にゆくにした怖れつつ獨り棲む我は

張合ひなく重ねおく朝顔の鉢見るにつけ去年(こぞ)は妻子らと樂しかりにし

蕗(ふき)の薹(たう)に飽きし鑛山(かなやま)の春を憶ふ獨り臺南にとりのこされて

五月はや硬き紫蘇の葉かみしめて夕餉の膳に寂しむ我は

鬨(とき)をつくり打ちはぶく雞(かけ)が夕庭に春埃(しゆんあい)あげぬ横日射すなか

常熱の深田に戰死せし猪首の友五彈ただ貫き胖
かなる體に

六月一日高雄より渡滿す

新高のあたりとぞ思ふ陸の方に雲盛りあがれり
海のはたてに

海なかの我船のマスト日もすがら黄のペンキ塗
れりさびしくもあるか

棲みふりし臺灣を捨てて滿洲に老いを埋めむに
更に感傷なし

山東角左手に見つつ我船のなほ北に向ふ宵寒く
なりて

滿洲につひの命を埋めなむと思ふにうら寂しこ
の國の土

よりどころなき寂しさや曠野のはて哈爾海ペス
ト調査所に明けて雨風　　奥地ハラハイにて一首

滿洲赴任雜詠

阿波鑛山に臺南に老い今し滿洲にやみがたきコスモポリタンの心抱き來つ

石ころを見ざる國原に土をねりし家むら寄りあへり楊柳のもとに

かくて人は生きて樂しきかあら野の上穴ごもる如き家に棲みつつ

蒙古風眼にしみるあした往診して土窖の如き家並を歩む

奥滿洲に着任のあした躬みづから先づ百斯篤豫防の注射せりける

食卓

眞裸に匪首と會見し降せりと警尉氣を吐けり高粱酒に醉ひて

狼（おほかみ）に脛（すね）食はれ來し警尉らと高粱酒を汲めりランプの下に

菜の花を食卓に活け内蒙古に妻がさみしき心やるらし

奥地測量の人病み來り身慄ひして途中にころがれる首級（くび）を語るも

枇杷（びは）に似て小さくかたき梨をもぎペスト部落に渇きを醫（いや）す

曠野

數町歩に咲きみつる向日葵（ひまはり）をあやしめば點心（てんしん）の料に種子（たね）を採るとぞ

をみなへし桔梗（きかう）が野の上に咲く見れば遠き百斯（ベス）篤（ト）村に心慰（なぐさ）む

滿洲國長嶺縣は曠野にて川なし山なし石くれ一つだになし

荷馬車にて五里往來(ゆきき)せしペスト村に今朝もまた
向ふ雨は止まぬに

昨日診(み)し人を剖(と)きゆくあら野の上雨降り過ぎて
目の前の虹

長夜

草履蟲(ざうりむし)やすでのたぐひが這ひ出づるアンペラに
つめたきランプの光

ペスト出でて一部落みな逃げちりしのちの騷ぎ
が沸立つごとし

通化省の匪賊討伐に立向ふ警尉をはげましてた
ち酒祝ふ

冬の六時に町は灯を消し人おとの絶えて長々し
き夜々とぞ思ふ

臺南の友にくれ來し蘭のこと寂しき滿洲の冬に
おもふも

昭和十四年

籠居

寒がりて籠れば大陸の感じなく時に阿波鑛山を錯覺す

十月も末鄭家屯にペスト五人でき二人遁げたる警報を受く

我炕の煙立ちたつ雪空にあかあかと明治節の日の丸の旗

滿洲奥地にひそまりて夜半に思ふかなちぢまれる吾の命の末を

話題

火事に遭ひし日系教員を連れ來り酒振舞ひぬ雪の降る夜に

我部屋の硝子戸あつく鎖したる氷は日をつぎてとくることなし

枯柳にうり物の唐辛子を赤々と懸けしばかりが目立たしき町

往診二首

落花生をつまみ食ひつつのろくさき連れの満人を喚ぶ驢馬の上より

新京にて一夜に二十餘人が凍死せし記事などを人の話題にもせぬ

屋内

窓框にのせし含嗽水が夜の間にすべもなきかなや凍りつめをり

凍りたる澤庵の切口がきらめくを見せて厨の寒さいふ妻

我よりも遠視のつよき古妻が夜も本が讀めずはやく寝たがる

もののものしく氷はりつめし閨の戸の硝子ににじむ夜半の月かげ

満洲馬にまたがりて十里白雪を蹴ちらして殺人
剖検に向ふ

厨音

雪にうもれ日本人と逢はぬ幾日ぞと妻とぞ語る
一月も過ぎて

満洲の寒さに風呂もいやになり二尺ざしにて背
を掻きをり

手斧もて朝々臺所の水甕の氷くだく音に目ざめ
つつ病む

蜩（ひぐらし）をたのしみききし夢さめてわが耳鳴（みみなり）は痼疾と
なりぬ

日露役にたまはりし功七級を引あてに酒呑めり
し杣人（そま）の命をぞ思ふ

阿波鑛山回顧

新雪

朝日子がうす紅に新雪(あらゆき)の野を染め來(く)るに息しづめをり

日傾く荒野(あらの)の涯(はて)にさむざむと家二つ白きけむり上げそむ

蒙古風砂けぶる空にあはれなり鴉らの聲昏れてもきこゆ

病中小吟

二重扉(ど)のガラス凍りてうす暗き部屋にこもらひ物を思へる

臺南に今咲かむ蟹蘭(かにらん)の紅(くれなゐ)が冷えしヲンドルの闇のまぼろし

滿洲奧地終吟

目に耳に日支事變の刺激なき奧滿洲の冬つきて春

彼岸（ひがん）來て春日たむろと思へども干し物は見るみるかたく凍りぬ

來むかふ春遲けれや彼岸過ぎて掘る地下三尺にして凍る固土（かたつち）　長嶺戒煙所起工

木蓮のたちよそふ頃と思ふだに心はいたし德島山路町の家　德島同題

新京移居

臺灣生れの吾子が兵となり屯（たむろ）せる滿洲新京に我も來て棲む

杏（あんず）咲けど河床（かはどこ）の氷なほ厚く南嶺兵營の道に踰（こ）え行く

新京驛のばねきかぬベンチに腰をおろし人待ちゐつつ寒き春雨（はるさめ）

時じくの寒き小雨や入りくめる熙光胡同にたづねわづらふ

たはやすく五月の雪が新京に降りつむ見たり厠
にありて

老生

なあ戰友と連（つれ）によびかけ兵吾兒（あこ）が酒のあとおど
ろくばかりばくつく　豚兒二等兵を訪ふ一首

臺灣の歌の仲間の噂には小郭家滿洲に病み死に
たりと

憲吉の娘教へしてふ先生と滿洲の雪に酌みつつ
かたる　大江氏一首

昨日剃りし頬の白毛がすぐに目立ち毛ぶかき老
いのせまるうつそみ

思ふことありて

目の下にたるる眉毛をたぐさにて物思ふかなせ
まる行末（ゆくすゑ）

しかすがに老妻の物ぐさを憎め淺夜すでにくた
くたに眠るさまはあはれに

何かにつけ首都首都と言ひたがる新京びとの癖
にもなれつ

五月念三

わが汽車にま近くなびく山梨の花のむらがりの
にほひがあまし

文よむ夜の眼鏡にもはふ蠅うるさし新聞をかぶ
りて物をぞおもふ

洗濯物妻がもちこみし支那風呂に我はまどろみ
夕べとなりぬ

天理敎會に滿人鮮人白系露人らとおちあひ神酒(みき)
をのみてうたひぬ

天理敎をわれに吾妻(あづま)にしふる人日に日に來るぞ
歌のさまたげ

新京のそらを掩ひて柳絮(やなぎわた)とび光りよどみて降り
なづむかな

ノモンハン事件しげき頃滿洲機が日に日にとべ
り我家の上

雷(かみなり)がなりわたる新京の空よりぞ柳絮ふりくる限
り知られず

エレベーターの中にまをとめのにほふときの間
和(なご)む我心かも

昭和十六年三月十四日印刷
昭和十六年三月十八日發行

加納小郭家歌集
停 定價参圓

版權所有

著者 加納小郭家
發行者 東京市神田區駿河臺二丁目十番地 橋本福松
印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

發行所 東京市神田區駿河臺二丁目十番地 古今書院
振替口座東京三五三四〇番
電話神田(25)三七五三番

精興社印刷

齋藤茂吉
土屋文明　編輯

創刊三十年

月刊短歌雜誌　**アララギ**

每月一日發行
定價七拾錢

每號二百三十頁を越ゆる大册に、岡麓、齋藤茂吉、土屋文明、土田耕平、結城哀草果、竹尾忠吉、高田浪吉、森山汀川其他會員八百餘名の作品及び研究批評を掲載し、常に現歌壇第一線にありて意義ある活動を三十年來繼續して居る。アララギ會員たる初心者のためには土屋文明が懇切なる添削批評の任に當る。詳細はアララギ發行所に照會のこと。

東京市赤坂區青山南町五丁目八十番地
發行所　アララギ發行所
電話青山(36)三六二六番
振替口座東京二八三四三番

東京市神田區神保町二丁目三番地
發賣所　岩波書店

萬葉集叢書（古今書院發行）

第一輯	富士谷御杖遺著　島木赤彦校訂	萬葉集燈	品切
第二輯	荷田春滿遺著　島木赤彦校訂	萬葉集僻案抄	品切
第三輯	橘守部遺著　折口信夫校訂	萬葉集檜嬬手	品切
第四輯	荒木田久老遺著　島木赤彦校訂	萬葉考槻落葉	定價二圓八十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第一卷	定價二圓八十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第二卷	定價三圓五十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第三上	定價二圓四十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第三下	定價二圓二十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第四卷	定價三圓二十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第五卷	定價二圓二十錢　送料二十一錢
第五輯	岸本由豆流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集攷證　第六卷	定價二圓二十錢　送料二十一錢
第六輯	下河邊長流遺著　武田祐吉校訂	萬葉集管見	定價三圓二十錢　送料二十一錢

第七輯 池田泰良修 上田秋成補 武田祐吉校訂	萬葉集目安補正	定價二圓	送料二十一錢
第八輯 仙覺律師遺著 佐佐木信綱校訂	仙覺全集	定價四圓二十錢	送料三十三錢
第九輯 佐佐木信綱解說	秘府本萬葉集抄	定價三圓五十錢	送料十五錢
第十輯 佐佐木信綱編	萬葉集叢刊 中世篇	定價四圓二十錢	送料三十三錢
藤澤古實 廣野三郎 編	萬葉集全卷（総革皮装天金特製）	定價三圓八十錢	送料二十一錢
藤澤古實 廣野三郎 編	萬葉集全卷（普及版）	定價一圓五十錢	送料二十一錢
高田浪吉著	萬葉集鑑賞 卷第一	定價一圓	送料八錢
高田浪吉著	萬葉集鑑賞 卷第二	定價一圓二十錢	送料十錢
高田浪吉著	萬葉集鑑賞 卷第三	定價一圓五十錢	送料十五錢
武田祐吉著	續萬葉集	定價二圓八十錢	送料二十一錢
上村六郎 辰巳利文 著	萬葉染色考	定價二圓二十錢	送料十五錢
豊田八十代著	萬葉植物考（訂正增補）	定價二圓二十錢	送料十五錢
武田祐吉著	神と神を祭る者との文學	定價二圓三十錢	送料十五錢
武田祐吉著	萬葉集書志	定價二圓七十錢	送料二十一錢

アララギ關係書目錄

齋藤茂吉著	柿本人麿（總論篇）	岩波書店發行	定價三圓五十錢
齋藤茂吉著	柿本人麿（鴨山考補註篇）	岩波書店發行	定價二圓八十錢
齋藤茂吉著	柿本人麿（評釋篇卷之上）	岩波書店發行	定價約五圓
齋藤茂吉著	新選秀歌百首（改造文庫）	改造社發行	定價三十錢
齋藤茂吉校訂	新訂金槐和歌集（岩波文庫）	岩波書店發行	定價四十錢
土屋文明編	萬葉集年表	岩波書店發行	定價三圓八十錢
土屋文明著	歌集山谷集	岩波書店發行	定價一圓五十錢 特製二圓五十錢
土屋文明著	萬葉集名歌評釋	非凡閣發行	定價一圓三十錢
齋藤茂吉 土屋文明 選	左千夫歌集（岩波文庫）	岩波書店發行	定價二十錢
齋藤茂吉 土屋文明 編	左千夫歌論抄（岩波文庫）	岩波書店發行	定價四十錢
岡麓校訂	入木道三部集（岩波文庫）	岩波書店發行	定價二十錢
齋藤茂吉 土屋文明 選	長塚節歌集（岩波文庫）	岩波書店發行	定價四十錢

齋藤茂吉 久保田不二子選 赤彥歌集（岩波文庫） 岩波書店發行 定價四十錢

結城哀草果著 歌集 村里生活記 岩波書店發行 定價一圓八十錢

高田浪吉著 作歌手記 古今書院發行 定價一圓五十錢

高田浪吉著 中世近世 名歌私抄 古今書院發行 定價一圓五十錢

高田浪吉著 短歌の鑑賞法 古今書院發行 定價一圓五十錢

結城哀草果著 歌集 續村里生活記 岩波書店發行 定價一圓八十錢

齋藤茂吉著 自選歌集 朝の螢 改造社發行 定價一圓八十錢（改造文庫四十錢）

島木赤彥著 自選歌集 十年 改造社發行 定價一圓八十錢（改造文庫四十錢）

古泉千樫著 自選歌集 川のほとり 改造社發行 定價一圓八十錢（改造文庫四十錢）

中村憲吉著 自選歌集 松の芽 改造社發行 定價一圓八十錢（改造文庫四十錢）

土屋文明著 自選歌集 放水路 改造社發行 定價一圓八十錢

長塚節全集 全六卷 春陽堂發行

赤彥全集 全八卷 岩波書店發行

中村憲吉全集 全四卷 近刊

アララギ叢書目次

第一編 島木赤彥 中村憲吉著 馬鈴薯の花 古今書院發行 定價一圓八十錢

第二編 齋藤茂吉著 赤光 絕版

第三編 古泉千樫著 屋上の土 改造社發行 定價二圓五十錢

第四編 島木赤彥著 切火 絕版

第五編 齋藤茂吉著 短歌私鈔 絕版

第五編 齋藤茂吉著 續短歌私鈔 絕版

第六編 中村憲吉著 林泉集 春陽堂發行 定價二圓二十錢

第七編 齋藤茂吉著 童馬漫語 品切

第八編 島木赤彥著 氷魚 岩波書店發行 定價二圓五十錢

第九編 長塚節著 長塚節歌集 品切

第十編 齋藤茂吉著 あらたま 品切

第十一編 伊藤左千夫著 左千夫全集 絕版

第十二編 行路社同人編 松倉米吉歌集 古今書院發行 定價一圓五十錢

第十三編 土田耕平著 青杉 古今書院發行 定價一圓八十錢

第十四編 石原純著 靉日 品切

第十五編 中村憲吉著 しがらみ 岩波書店發行 定價一圓八十錢

第十六編 島木赤彦著 歌道小見 岩波書店發行 定價一圓五十錢

第十七編 アララギ發行所編 大正十二年震災歌集 灰燼集 古今書院發行 定價一圓八十錢

第十八編 島木赤彦著 太虛集 古今書院發行 定價二圓二十錢

第十九編 村上成之著 翠微 古今書院發行 定價一圓五十錢

第二十編 土屋文明著 ふゆくさ 古今書院發行 定價二圓三十錢

第二十一編 島木赤彦著 萬葉集の鑑賞及其批評 岩波書店發行 定價二圓

第二十二編 岡麓著 庭苔 古今書院發行 定價二圓五十錢

第二十三編 島木赤彦編 アララギ年刊歌集第一（大正十三年度） 岩波書店發行 定價一圓五十錢

第二十四編 齋藤茂吉 土屋文明編 アララギ故人歌集1 アララギ發行所 定價二圓

第二十五編 齋藤茂吉著 寒雲 古今書院發行 定價三圓

第二十六編 齋藤茂吉著 金槐集私鈔 春陽堂發行 定價二圓八十錢

第二十七編 齋藤茂吉著 良寛和歌集私鈔 近刊

第二十八編 齋藤茂吉著 童牛漫語 近刊

第二十九編 門間春雄著 門間春雄歌集 岩波書店發行 定價一圓八十錢

第三十編 平福百穗著 寒竹 古今書院發行 定價二圓二十錢

第三十一編 藤澤古實著 國原 岩波書店發行 定價二圓六十錢

第三十二編 島木赤彦著 柹蔭集 岩波書店發行 定價二圓

第三十三編 アララギ同人編 アララギ年刊歌集第二（大正十四年度） 岩波書店發行 定價一圓五十錢

第三十四編 アララギ發行所編 アララギ故人歌集2 近刊

第三十五編 岡麓著 歌話書話 代々木雜筆 近刊

第三十六編 中村憲吉著 輕雷集 古今書院發行 定價二圓二十錢

第三十七編 アララギ同人編 アララギ年刊歌集第三（大正十五年度） 岩波書店發行 定價一圓五十錢

第三十八編 結城哀草果著 山麓 岩波書店發行 定價二圓三十錢

第三十九編 高田浪吉著 川波 古今書院發行 定價二圓三十錢

第四十編　齋藤茂吉著　短歌寫生の說　品切

第四十一編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第四（昭和二年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第四十二編　伊藤左千夫遺著　齋藤・土屋編　左千夫歌論集　卷一　岩波書店發行　定價四圓

第四十二編　伊藤左千夫遺著　齋藤・土屋編　左千夫歌論集　卷二　岩波書店發行　定價四圓三十錢

第四十二編　伊藤左千夫遺著　齋藤・土屋編　左千夫歌論集　卷三　岩波書店發行　定價四圓

第四十二編　伊藤左千夫遺著　齋藤・中村・土屋校　増訂左千夫歌集　岩波書店發行　定價三圓五十錢

第四十三編　土屋文明著　往還集　岩波書店發行　定價一圓八十錢

第四十四編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第五（昭和三年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第四十五編　竹尾忠吉著　八衢　古今書院發行　定價二圓

第四十六編　高田浪吉著　作歌餘錄　古今書院發行　定價二圓六十錢

第四十七編　齋藤茂吉著　念珠集　品切

第四十八編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第六（昭和四年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第四十九編　加納曉著　加納曉歌集　古今書院發行　定價二圓二十錢

第五十編　齋藤茂吉著　短歌初學門　近刊

第五十一編　今井邦子著　紫草　岩波書店發行　定價二圓三十錢

第五十二編　築地藤子著　椰子の葉　岩波書店發行　定價二圓

第五十三編　森山汀川著　峠路　古今書院發行　定價二圓二十錢

第五十四編　久保田不二子著　苔桃　岩波書店發行　定價二圓二十錢

第五十五編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第七（昭和五年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第五十六編　高田浪吉著　砂濱　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第五十七編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第八（昭和六年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第五十八編　白水吉次郎著　白水吉次郎歌集　古今書院發行　定價一圓五十錢

第五十九編　高田浪吉著　現代短歌の鑑賞　古今書院發行　定價一圓五十錢

第六十編　今井邦子著　茜草　隨筆集　古今書院發行　定價二圓

第六十一編　土田耕平著　斑雪　古今書院發行　定價一圓五十錢

第六十二編　竹尾忠吉著　平路集　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第六十三編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第九（昭和七年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第六十四編　中村憲吉著　輕雷集以後　岩波書店發行　定價一圓八十錢

第六十五編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十（昭和八年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第六十六編　岡麓著　小笹生　古今書院發行　定價二圓二十錢

第六十七編　岡麓著　朝雲　岩波書店發行　定價二圓二十錢

第六十八編　結城哀草果著　すだま　岩波書店發行　定價二圓二十錢

第六十九編　金田千鶴著　金田千鶴歌集　古今書院發行　定價二圓二十錢

第七十編　平福百穂著　竹窓小話　古今書院發行　定價二圓

第七十一編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十一（昭和九年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第七十二編　高田浪吉著　堤防　古今書院發行　定價二圓三十錢

第七十三編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十二（昭和十年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第七十四編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十三（昭和十一年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第七十五編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十四（昭和十二年度）　岩波書店發行　定價一圓五十錢

第七十六編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十五（昭和十三年度）　岩波書店發行　定價一圓七十錢

第七十七編　アララギ同人編　支那事變歌集　岩波書店發行　定價一圓七十錢

第七十八編　アララギ同人編　アララギ年刊歌集第十六（昭和十四年度）　岩波書店發行　定價一圓七十錢

第七十九編　廣野三郎著　白埴　古今書院發行　定價二圓八十錢

第八十編　森山汀川著　雲垣　古今書院發行　定價二圓八十錢

第八十一編　山口茂吉著　赤土　墨水書房發行　定價二圓八十錢

第八十二編　加納小郭家著　加納小郭家歌集　古今書院發行　定價三圓

第八十三編　鹿兒島壽藏著　潮汐　近刊

357
139

終